

〔課題演習報告〕

つくりだす喜びを味わわせる図画工作科の学習指導の研究 —よさを伝え合い表現を高め合う、表現と鑑賞を一体化させた活動の工夫を通して—

坂 田 隆 介

Ryusuke SAKATA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
(2017年1月6日受理)

本研究は、児童に「つくりだす喜び」を味わわせるための指導の方法について探ることを目的としたものである。手立ては、発想・構想段階の充実、よさを伝え合う鑑賞や表現を高め合う鑑賞の時間の設定の2点である。発想・構想段階の充実ではアイデアシートの活用と、試しの表現を行う時間の設定の2つの方法を実施した。よさを伝え合う鑑賞や表現を高め合う鑑賞の時間の設定では、題材の特性や児童の実態に応じて、題材の計画のなかに表現と鑑賞をバランスよく設定し授業実践を行った。その結果、質問紙や授業記録の分析、児童の作品等から、本研究が児童につくりだす喜びを味わわせることにつながるということが明らかとなった。

キーワード：つくりだす喜び、表現と鑑賞の一体化、よさを伝え合う鑑賞、発想・構想段階の充実

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

平成20年学習指導要領における、図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」と示されている。その中でも「つくりだす喜び」に着目し、つくりだす喜びを味わわせるための学習指導について探っていこうと考えた。ものづくりを行うにあたって、自分で一から考え、生み出したものを完成させた時の喜び(つくりだす喜び)は、児童の自信へとつながり、さらなる意欲へと発展するための重要な要素の一つであると考えからである。また、今回の学習指導要領改訂では、「感性を働かせながら」という言葉が加わり、表現及び鑑賞の活動において、児童の感覚や感じ方、自分の表現の思いなどを、一層重視する目標となっている。このことから、互いのよさを伝え合う活動や表現を高め合う交流活動を行うことで、児童の感性を高めていきたいと考え副題として設定した。

(2) 図画工作科の現状と課題

現在、図画工作科の課題の一つとして鑑賞が十分に行われていない実態があり、鑑賞で学んだことを表現に生かすことができていないということ

があげられる。このことは、日本美術教育学会(2015)が全国の小学校教諭に行った図画工作科の鑑賞学習指導についての調査において、「表現と鑑賞の関連づけ」の質問に対する回答が「不十分、やや不十分」を合わせて半数を超えていることや、「鑑賞学習指導の積極性」についての質問も以前よりは、回復傾向にあるが、未だ消極性が目立つ結果となっていることから言える。

鑑賞学習指導に消極的である理由を見てみると、「表現の時間を確保するあまり鑑賞の時間がない」等の時間の問題が上位にきている。このことから、題材の終末段階のみで鑑賞活動を行うのではなく、題材の構成を考える上で、短い時間の鑑賞活動をバランスよく設定し計画的に表現と鑑賞を行うことが重要になってくると考える。

児童の現状としては、全体的に図画工作科を好きな子が多い傾向にある。しかし、国立教育政策研究所の調査結果(2010)では、「自分なりの表し方を工夫し、提示した方法以外の方法でつくることができた児童は50%」と示されており、自分の表したいものを自分なりの方法で表すことができていない状況である。また、「自分の作品について感じたことや考えたことを話したり書いたりすることは好きですか」の問いに対し、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は42.7%と低い結果である。このことから、自分の作品への自

信のなさや、つくりたいものが明確でないということが考えられる。これでは、図画工作科の目標である、「つくりだす喜び」を十分に味わうことができていない状況であると考ええる。

(3) 鑑賞の重要性

図画工作科の課題である鑑賞の時間の不足や自分の作品について考えたことや感じたことを交流する場の不足を踏まえ、鑑賞の重要性を主張していきたい。筆者は、彫刻制作の経験を通して、表現するためには鑑賞が重要であるということを実感した。理由は、表現のための発想は、鑑賞の経験から生まれると感じたからである。また、作品の自己鑑賞や相互鑑賞、有名作家の作品の鑑賞等、様々な視点で自己の作品と向き合い、得たものを表現に生かすことが重要であると感じたからである。この経験から、表現と鑑賞のバランスがものづくりを行う上で重要になると考えた。平成20年小学校学習指導要領においても、「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である。」と明記されており、表現を高めるためには、鑑賞が不可欠であることが分かる。

(4) 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童に「つくりだす喜び」を味わわせるための指導の方法について探ることである。そのために、発想・構想段階の充実、よさを伝え合う鑑賞や表現を高め合う鑑賞の時間の設定の2点を重要視していく。発想・構想段階の充実では、2つの方法を考えている。1点目は、アイデアシートを活用し、作品への思いの明確化やつくりたいものの明確化を図る。2点目は、試しの表現を行う時間を設定し、実際に表現を行う中で発想させる。よさを伝え合う鑑賞や表現を高め合う鑑賞の時間の設定では、自分の作品のよさを知ることや友達の仕事のよさを見つけること、そして友達の仕事のよさを自分の作品に生かし、表現を高めることなどを行い、鑑賞の能力を高め、感じたことを言語化できるようにしていきたい。また、自分のよさを知ることによって作品への自己評価の向上にもつなげていこうと考えている。

2 先行研究

(1) つくりだす喜びを味わうについて

平成20年小学校学習指導要領解説図画工作科編では、「つくりだす喜びを味わうとは、感性を働か

せながら作品などをつくったり見たりすることそのものが喜びであり楽しいことを示している。それは、児童の欲求を満たすとともに、自分の存在を感じつつ、新しいものや未知の世界に向かう楽しさにつながる。また、友人や身近な社会とのかかわりによって、一層満足できるものになる。」と示してある。また、石井(2012)は、「表したいものを、表したいように、表すことができること、すなわちその子のもつ思い(主題)を実現させること」と述べている。このことから、つくりだす喜びは、児童が自身の思いに合った表現ができたときに味わうことができ、他者との関わりの中でその喜びを一層高めることができるものであると考える。

また、つくりだす喜びの構成要素として、発想・構想する喜び、自他のよさに気付く喜び、表現が高まる喜び、認められる喜びの4つの喜びがあると考えている。この考え方は、「つくりだす喜び」が題材終了後のみで味わうことができるというのではなく、授業を行っていく中で何度も味わうことができるということを示している。このことは、竹下(1987)が、表現の喜びとして「発想したり、それをもとに発展させたりして、ものを創造していく喜び、構想する過程で、イメージをねり上げ、豊かな表現の仕方を身につけていく喜び、『願い』や『ゆめ』を形あるものに生み出して、自己を充足させる喜び」の3つの喜びを示し、発想・構想の段階、表現の段階、鑑賞の段階とそれぞれの段階で喜びを味わうことができるということからもいえる。

(2) 表現と鑑賞の一体化について

表現と鑑賞の一体化とは、五十嵐(2011)は「子どもが『みる』課題意識を持つことができる表現と『つくる』課題の解決方法を見付けることができる鑑賞を連続的に構成すること」と述べている。また、澁谷ら(2010)は「鑑賞を積極的に授業に取り入れるために、造形活動の中に効果的に鑑賞を取り入れ相互に能力を高める授業の在り方」と述べている。このことから、表現と鑑賞の一体化とは、題材の計画において表現と鑑賞をバランスよく設定し、表現に生きる鑑賞活動を取り入れ、よさを伝え合い、表現を高めていくことであると考えられる。

(3) 想像活動の心理的なメカニズムについて

ヴィゴツキー(1930)は、想像活動の心理メカニズムを理解するために、空想と現実の関係について言及し、想像活動を現実と結びつけている基本的な形態を4つ示している。それは、①過去の経験の要素からの想像、②他者の経験を基にした想像、③情動的結合が伴う想像、④結晶化された想像の4つである。

この4つの形態における想像力について國清(2014)は、次のように定義づけている。

- ① 既習の学習経験や生活経験を再現的に思い起こし、自分自身の見方・感じ方・表し方で主体的に作品を読み解くことのできる力
- ② 他者の見方・感じ方・表し方や作品の客観的要素に基づいて、自分の見方・感じ方・表し方に取り入れ作品に感情移入することができる力
- ③ 複数の作品などから瞬間的に気分に調和した心的印象や考えやイメージを選ぶことができる力 (下線部は筆者)
- ④ 作品の意味や価値を新しく創造するとともに、自分自身を理解し自分の価値観を批判的に検討できる力

このことから、①、②、③、④の全ての形態において過去の経験は、重要であり、創造力の源になっていることがわかる。児童に、図画工作科において作品を見たり、描いたり、つくったりする体験を豊富に行わせるためにも、表現と鑑賞を一体化させた授業展開が有効であるといえる。本研究では、①、②の想像力を重視していく。

(4) 先行実践について

1) 表現と鑑賞の一体化の実践

石井(2012)は、表現活動の途中に「交流タイム」を設定し、友達の作品のよさや工夫などを知る活動を行っている。石井(2012)は交流タイムの意義について、「交流タイムの意義は、主題の確かさや制作の方向性、表現方法などについて振り返ったり、確認したりすることにある。そうした交流によって得られたことが、さらなる表現及び鑑賞の意欲につながっていく。」と述べている。また、工夫点として、「題材の特性や子どもの実態に応じて、交流の形態や実施するタイミングを工夫する。」と述べており児童に交流する必然性をもたせている。

事後のアンケート調査において、「制作に『交流タイム』が必要であったかという質問に対し97%が必要であったと答えている」と述べていることから「交流タイム」は有効であったといえる。

五十嵐(2011)は「ミニ鑑賞」として毎時間の始業5分間を鑑賞の時間とし表現と鑑賞を一体化させた学習指導について実践している。五十嵐(2011)は、成果と課題の中で「仲間のすぐれた表現方法を取り入れ、作品の改良を加えていた。」と抽出児の表現の高まりについて述べており、ミニ鑑賞の有効性についても読み取ることができる。このことから「交流タイム」や「ミニ鑑賞」のような相互鑑賞の場を本研究でも設定していく。

2) 学習プリント

児童の発想・構想の充実を図ったり、鑑賞で感じたことを書き留めたりするために学習プリントは必要不可欠である。石井(2012)は、①「主題を明確にし、立ち返ることができる学習カード」②「見通しを明確にしていく学習カード」の2点に焦点を当て、主に文章を使って構想を行わせている。五十嵐(2011)は、鑑賞で得た情報を書き留めるためや着色の試し塗りのためなど表現方法の試行錯誤を促す教材としてB6サイズのミニスケッチブックを用いている。この2つの実践の要素を参考に、本研究では、言葉での発想や絵での発想ができ、交流の記録が残る学習プリントを考案する。

3 学習指導の仮説

先行実践をふまえ、つくりだす喜びを味わわせるための学習指導の実践として、表現と鑑賞を一体化させた学習指導の中で発想・構想を充実させる手立てを行っていく。表現と鑑賞を一体化させた学習指導を図で表すと次の図1のようになる。

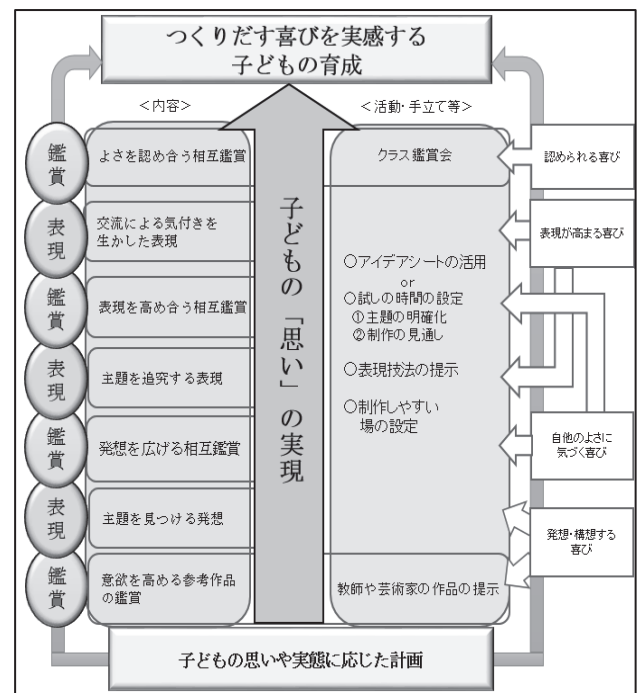


図1 基本的な学習過程

4 実践校Aの児童の実態

- 図工の授業を通して満足感を感じたことがある児童は、1組90%、2組88%。
- 満足感を感じるときは、「苦労して作品ができたとき」、「思い通りに完成したとき」である。
- 図工の授業で難しいと感じるところは、1・2組

共通で、「アイデアは思い浮かぶが思い通りにつ
くれないところ」「アイデアが浮かばないところ」
である。

- 自分の作品のよさを見つけることや自分の作
品のよさを相手に伝えることに課題がある。
- 1・2 組ともに、80%以上の児童が友達の作品
のよさを見つけ、伝えることができる。

このアンケート結果から、児童が図画工作科の
授業において「つくりだす喜び」を感じるためには、
児童の思いを実現させ、作品を完成させることが
重要であると考え。

そのために、発想・構想を充実させること、相互
鑑賞により表現方法の幅を広げることの 2 点が必要
になると考える。加えて、相互鑑賞において、友
達の作品のよさを見つけ、伝え合う活動を行い、作
品に対する自己評価を高め、つくりだす喜びにつ
ながっていききたい。

5 実践授業 A

(1) 実践授業【くるくる回して・6 年】

1) 授業の概要

日時・学年：平成 28 年 1 月・6 年生（A 小学校）

題材名：くるくる回して（開隆堂 5.6 年上）

表 1 題材の計画（全 6 時間）

次	時	主な活動	子どもの活動に対する教師の支援
1	2	○ 参考作品を鑑賞し、動く仕組みに興味をもち、構造を知る。 ○ ヒントカードや参考作品を参考にしながら動く仕組みをつくる。	○ 作品のイメージをもたせるために、参考作品を提示する。 ○ 仕組みの構造を理解させるために動く仕組みの参考作品を提示する。 ○ つくり方のヒントカードを提示する。
2		○ 動く仕組みをもとに、アイデアシートを使って作品のアイデアを練る。	○ アイデアシートの使い方について、参考作品を提示しながら説明する。 ○ 必要な材料なども考えさせる。
3	2	○ アイデアシートを基に、アイデアの交流を行う。 ○ 交流で得たことを生かしてアイデアシートを改善する。	○ 1 時間を使ってアイデアシートの交流を行う。鑑賞のポイントを確認するために、代表作品を提示し、全体交流を行い、その後、班交流を行う。班交流の際、付箋を用いる。
4		○ アイデアシートをもとに作品を制作する。	○ 机間指導を行いながら、子どもの面白い工夫などを教師が紹介する。
5	2	○ 班で交流を行いながら作品を制作する。	○ 様々な表現の方法を紹介する。
6		○ 制作の仕上げを行う。 ○ 完成した作品で遊びながら鑑賞を行う。	○ 活動の流れを確認し、仕上げまでの見通しを持たせる。

2) つくりだす喜びを味わわせるための手立て

① 発想・構想段階の充実

- 授業の 1 週間前に参考作品を教室に展示し、題材に対するイメージを膨らませること。
- アイデアシートを活用した発想・構想の時間の確保を行うこと。（言葉での発想、絵での発想の両方から作品のアイデアを広げる。）

② 表現と鑑賞の一体化

- 相互鑑賞の場を設定し、友達の作品のよさを見つけて自分の作品に生かすこと。
- 自分の作品のよさを客観的に伝えられるこ

とで、自己評価の向上を図ること。

3) 実践授業の実際

① 鑑賞の時間の設定

全 6 時間の中で発想・構想の段階で 2 回（5 分 全体、30 分 班）表現活動の中で 1 回（5 分 班）題材の終末段階で 1 回（10 分 全体）の計 4 回の鑑賞活動の場を設定した。発想・構想の段階の 2 回目の鑑賞活動の中では、オレンジと黄緑 2 色の付箋を用いて、オレンジは作品のよさやアドバイスを書く付箋、黄緑は友達の作品を鑑賞して取り入れたことを書く付箋として活動した。

また、こういった鑑賞活動を取り入れることで、児童が表現活動を行いながらも自主的に互いの作品を見合う様子も多く見受けられるようになった。

② アイデアシートの活用

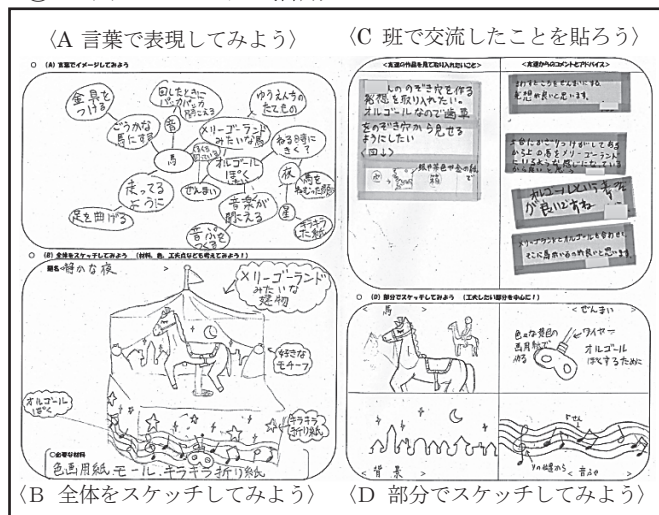


図 2 アイデアシート

図 2 は、A 児が実際に描いたアイデアシートである。このアイデアシートの活用は、6 時間構成の第 2 次に行った。このアイデアシートは、4 つの部屋に分かれており、それぞれ、言葉や絵、交流の記録などから発想を行えるようになっている。A では、言葉を用いて発想できる。イメージマップの要領で発想を広げていき、主題を明確にしていこう。B では、絵を用いて発想できる。アイデアスケッチを行い、イメージを具現化できるようになっている。C では、交流の際に友達からもらった付箋を貼って記録し、振り返ることができるようにする。D では、特に工夫したい部分を詳しくスケッチすることができるようになっている。このように、言葉と絵の両方を用いて発想させることでアイデアを思いつきやすくすることができ、児童の思いを明確化することができる。と考える。

図 2 は A 児が描いたアイデアシートである。A 児は、クランクの動きや、動く音から言葉によって発想をひろげ、馬が走っているメリーゴーランド

のようなオルゴールをスケッチしている。

班の友達からのコメントには、「メリーゴーランドとオルゴールを組み合わせているところがいいね。」や「仕組みの動きや音から馬を思いつているのいいね。」というようなものがあり、作者の工夫がよさとして伝わっていることが分かる。このことから、アイデアシートの活用は有効であったと考える。

③表現に生きる鑑賞活動

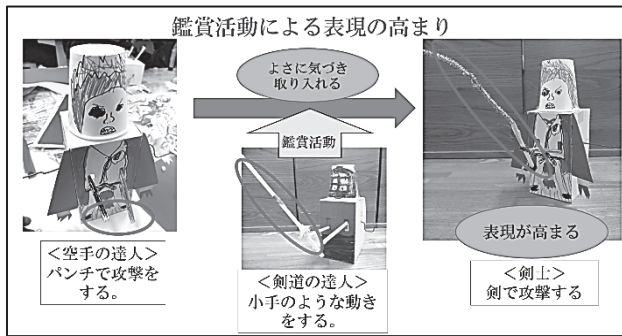


図3 B児の作品の変化

題材の構成において計画的に表現と鑑賞をバランスよく設定したことで作品がよりよくなったと感じている児童が多かった。その中の一例としてB児とC児のやり取りを取り上げる。

B児は当初、仕組みの動きである、ストローが上下するうごきからパンチをしている人を発想し、「空手の達人」としておもちゃの制作を行っていた。しかし、鑑賞活動の中でC児の作品である「剣道の達人」の竹刀の動きを見てよさを感じ、自分の作品に取り入れようと考えた。最終的に、B児は、「剣士」と題名を変えてC児の工夫を取り入れ、剣を振る剣士のおもちゃの作品を制作した。また、B児は、剣の色や曲線を表現するために、C児の竹刀の工夫に加えて、ストローにモールを差し込むという工夫を行い、自分なりの表現にしていた。B児は、自分の作品が完成に近づいているにもかかわらず、C児の作品を鑑賞したことで作品をつくり直し、自分が満足できる作品に仕上げていた。このことから、鑑賞活動は、児童の表現に対する意欲と表現を高めることにつながると考える。

④成果と課題（○成果、●課題）

- 1 80%の児童が思い通りに作品をつくることのできた。
- 2 96%の児童が満足感を感じることができた。
- 3 アイデアシートを使うことで84%の児童がアイデアを生み出しやすと感じた。
- 4 69%しか自分の作品のよさを見つけない児童らが、授業を行ったことで84%まで向上した。

- 1 アイデアシートを用いてもアイデアが浮かばない児童に対する手立てが足りなかったこと。
- 2 付箋の記入について「かっこいい」「かわいい」といったように、美術的な視点（色づかいや形、クランクの動きを利用したよさ）についての記述がないものがみられたこと。

⑤考察

(a)発想する喜び（成果3、課題1）

成果3の要因としては、アイデアシートを活用することで言葉と絵の両方を使って発想できたことが良かったのではないかと考えられる。いいアイデアが浮かんだ児童のアイデアシートを分析すると、言葉によってたくさんのイメージが具体的に書かれていた。（例：馬→メリーゴーランドのような馬→遊園地のような建物 等）そして、その言葉でのイメージを作品のアイデアとして構成するために、絵を使ってアイデアスケッチを行っていた。さらに、得意な児童の傾向としては、部分的なスケッチを行いながら、より詳しく作り方の構想まで行っていた。このことから、アイデアシートを活用することで、児童が自分のつくりたいものを発想し構想することができ、発想・構想する喜びを味わうことができるといえる。しかし、課題1にもあるように、16%の児童は、アイデアシートを用いても自分なりに納得できるアイデアを生み出すことができなかった。発想することが困難な児童の傾向としては、イメージが具体的ではないという事があげられる。（例：かえる→緑や、葉→黄緑等）これでは、絵や作品として具体化することが難しいと考える。自分なりに納得できるアイデアを発想することができるようにするためにも、イメージをより具体的に（かえる→ジャンプするかえる等）ための手立てが必要であると考え。

(b)自他のよさに気づく喜び（成果4・課題2）

付箋を使って作品のよさを伝え合う鑑賞の時間を設定したことで、自分の工夫した点を見つけてもらえたり、自分では気づかなかった新たなよさを発見してもらえたりすることができていた。このことが成果4につながったと考える。事後アンケートにも「自分の工夫している所を褒めてもらえてうれしかった」や「自分とは違う見方をしている人がいて面白いと思った。」といった記述がみられた。このことから、自他のよさに気づく喜びを味わうことができていると考える。自分の作品によさを見出すことができなかった児童の傾向としては、作品を制作する過程で失敗してしまったり、未完成と思っていたりすることが事後アンケートからわかった。また、図工に対して劣等感をもって

いる児童も自分の作品のよさに気づくことができている。さらに、課題2の付箋の内容についても影響しているのではないかと考える。このことから、完成させることや失敗と感じさせないことが重要であり、少しでも自分の作品のよさを感じることができるように、作品のよさを具体的に伝えることができる手立てが必要であると考え。 (c) 表現が高まる喜び (成果1・2)

成果1・2の要因としては、どの児童も自分なりの工夫を行っていたということがあげられる。満足感を感じた理由としては、「思い通りにできたし、友達と交流することでよい工夫を学べたから。」や「思い通りには、なかなかできなかったけど工夫はできて楽しかったから。」などがあり、

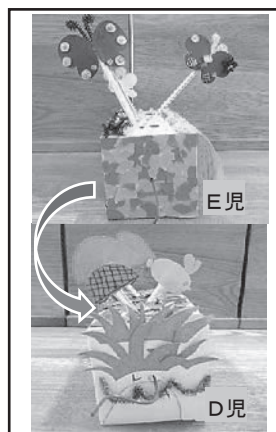


図4 D児の作品の変化

工夫してつくることのよさや友達の作品を鑑賞することのよさを感じていることがわかる。友達と交流することでよい工夫を学べたと記述しているD児は、E児の作品を鑑賞したことで土台の貼り絵の工夫によさを感じて自分の作品にも生かしている。また、D児の他にも83%の児童が鑑賞を行ったことで新たな工夫点が見つかったり、自分のつくりたいものがはっきりして制作意欲が高まったりしていた。このことから表現が高まる喜びを味わうことができていると考える。

(d) 認められる喜び (成果1・2)

題材の終末に行ったクラス鑑賞会では、友達の作品を動かしながら鑑賞を行った。児童らは、楽しそうに作品を鑑賞していた。鑑賞会後の感想では、「細かい部分まで注目して見てもらえたから嬉しかった。」や「自分の作品が上手くできているか不安だったけど、先生や友達により所をいってもらえたのでとても自信がついた。」などがあった。この内容から、鑑賞会を通して、自分の頑張りを認められる喜びを感じ、その喜びが自信へとつながっている児童もいることがわかる。よさを伝え合う鑑賞の有効性を感じることができたと考え。

6 実践校Bの児童の実態

○ 図工の授業を通して満足感を感じたことがあ

る児童は、91%である。

- 満足感を感じるときは、「作品が完成したとき」、「いい作品ができたとき」である。
- 図工の授業で難しいと感じるところは、「アイデアは思い浮かぶが思い通りにつけれないところ」である。
- 自分の作品のよさを見つけることや自分の作品のよさを相手に伝えることに課題がある。
- 友達の作品のよさを見つけることは得意だが、伝えることには課題がある。

このアンケート結果から、実践校Aと同様に発想・構想を充実させること、相互鑑賞により表現方法の幅を広げ、作品の自己評価を向上させることの2点を行い、児童のつくりだす喜びにつなげていく。鑑賞の際は、伝えることに課題を持っているため、付箋の活用を積極的に行っていきたい。

7 実践授業B

(1) 実践授業【めざせローラーの達人・5年】

1) 授業の概要

日時・学年：平成28年7月・5年生（B小学校）
題材名：めざせローラーの達人（開隆堂5.6年上）

表2 題材の計画（全5時間）

次	時	主な活動	子どもの活動に対する教師の支援
1	2	<ul style="list-style-type: none"> ローラーの正しい使い方を学ぶ。 ローラーを使って制作することで色の重なり的美しさを感じ取る。 参考作品を鑑賞し、ローラーの技について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ローラーの正しい転がし方をつかませるために、「行きは電車で帰りは飛行機」の合い言葉を用いて実演しながら説明する。 作品のイメージをもたせるために、参考作品（技を使っていない作品）を提示する。 ローラーの技をつかませるために参考作品（技を使っている作品）を提示する。
2		<ul style="list-style-type: none"> ローラーの技を活かして自分なりの表現を行う。（試しの時間） 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの表現に近づけさせるために、試しの紙を用意し表現の試行錯誤ができるようにする。また、子どもの作品に合わせた助言を行う。
3	2	<ul style="list-style-type: none"> 前時、制作した作品を班で交流し、友達の表現方法を知ることによって表現の幅を広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 交流を焦点化させるために、ローラーの技と色づかいの2つの視点を提示する。また、付箋を使うことで感じたことが文字に残るようにする。
4		<ul style="list-style-type: none"> 交流して得たことを基に、再度作品制作を行い、自分なりの表現を追求する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの表現を追求することができるようにするために、机間指導を行い、子どもの思いに応じて助言する。
5	1	<ul style="list-style-type: none"> 完成した作品を鑑賞し合い、よさを伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の作品のよさを伝えやすくするために付箋を使って作品のよさを交流させる。

2) つくりだす喜びを味わわせるための手立て

① 発想・構想段階の充実

- 試しの表現を行う時間を設定し、実際に表現を行う中で発想させること。

② 表現と鑑賞の一体化

- 相互鑑賞の場を設定し、友達の作品のよさを見つけて自分の作品に生かすこと。
- 鑑賞の視点を意識して鑑賞させるために、付箋を貼る場所の分類や付箋の色で分類できるような鑑賞シートを利用すること。

3) 実践授業の実際

①鑑賞の時間の設定

全5時間の中で発想・構想の段階で1回(10分全体)表現の段階で2回(15分班、15分全体)題材の終末段階で1回(30分全体)の計4回の鑑賞活動を設定した。表現の段階の鑑賞活動の中では、黄緑とオレンジの2色の付箋を用いた。今回は、ローラーの技と色づかいについて意識させるために黄緑はローラーの技のよさ、オレンジは色づかいのよさについて書く付箋として活動した。

②試しの表現を行う時間の設定

題材の特性として偶然性が重要であり、事前の構想は必要なかったため、本実践では、アイデアシートを利用しなかった。そこで、ローラーを使って絵を描くことでどんな表現ができるかをとらえさせ、発想しやすくするために、試しの表現を行う時間を設定した。

③児童の作品の変化

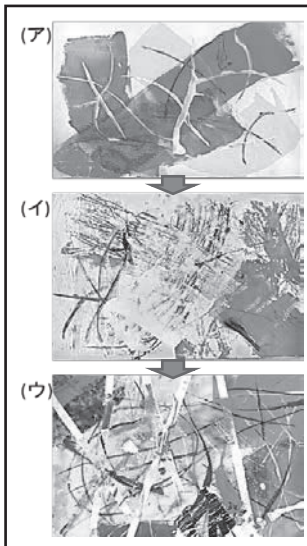


図4は、F児の作品の変化の様子を表したものである。(ア)、(イ)の作品は、試しの時間に描いたものである。F児は、(ア)の作品でローラーをそのまま転がす描き方とローラーの端を使って細い線を描く描き方を用いて表現している。(イ)の作品では、(ア)の作品の表現に加えて紐を巻き付けたローラーを使ってかすれた表現を行っている。ど

図5 F児の作品の変化 ちらの作品もピンクや黄色を使った鮮やかな色合いの作品である。この後、付箋を使った鑑賞の時間を設けたことでF児の作品は、大きく変化した。その作品が(ウ)題：「異次元のデータ」である。F児が鑑賞の時間(友達作品を鑑賞して取り入れたいことを見つける時間)に書いた付箋の内容は次のとおりである。F児は友達作品を鑑賞して、ローラーの技について書く黄緑の付箋には、「ドリップングを使ってみたい」「マスキングテープをつかう」といった内容を記入した。次に、色づかいについて書くオレンジの付箋には、「緑と黄色」「紫とピンク」「ピンクと白」の色の組み合わせについてよさを感じ、付箋に記入した。(ウ)の作品は、この付箋の内容を反映させて描かれている。(ア)(イ)の作品の表現に加えて、ドリップングやマスキングテープを使った表現を

行っており、色づかいについても黄色、白、ピンクの色の重なりが意識されている。F児の作品の変化の様子から、試しの時間と付箋を使った鑑賞の時間の両方を行ったことで、表現が高まることにつながったと考える。

④よさを伝え合う鑑賞

終末段階の鑑賞会では、とても活発な付箋の交換を行うことができた。ここでは、F児の作品に対する感想を紹介していきたい。感想の中には、「マスキングテープを使った線が本当にデータのように見えるね。」や「ピンクと水色と黄色の色合いが合っていていいね。」などがあつた。どの感想もローラーの技と色づかいについて意識されており、作者の工夫をよさとして伝えることができていた。感想としてF児は、次のように書いている。

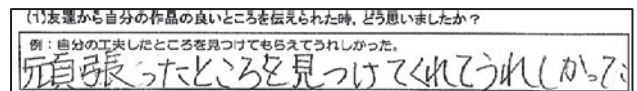


図6 F児の感想

感想からわかるように、児童は、自分の作品の工夫点に気づいて認められることで喜びを感じている。このことから、よさを伝え合う鑑賞を行うことで、つくりだす喜びにつなげることができると考えられる。

④成果と課題 (○成果、●課題)

- 1 試しの時間を設定することで、児童の表現に対する積極性が高まり、発想・構想の充実につながることができた。
- 2 表現と鑑賞を一体化させた授業を行うことで、友達作品のよさを取り入れて作品を高めることや、作品の自己評価を高めることができた。
- 3 92%の児童が付箋を使うことで友達によさを伝えやすかったと感じていた。
- 4 鑑賞を行うことで87%の児童が自分の作品のよさをみつけることができるようになった。
- 5 84%の児童が満足感を感じるようになった。
- 1 25%の児童(6/24人)があまり思い通りに作品をつくることができなかったと解答した。

⑤考察

(a)発想・構想する喜び(成果1)

今回は、題材の特性上、初めのアイデアスケッチを行わなかったため、試しの時間を設定した。授業の初めは、ローラーのみを使う表現方法や、やり直しができないことに対する不安から児童の表現活動がやや消極的であったが、画用紙を複数枚用意して、表現を試すことを可能にしたことで表現に対する積極性が生まれたと考えられる。児童は、様々な表現技法や色づかいを試すことで発想・

構想を行うことができたと考える。また、友達の作品や参考作品の鑑賞を行ったことで児童の発想・構想を高めることにもつなげることができたと考える。事後のアンケート調査では、友達の作品や参考作品の鑑賞を行ったことで「新たな工夫が見つかり工夫を取り入れたいと感じた。」や、「自分の描きたいものがはっきりした。」という回答が多数みられた。このことから本実践において発想・構想する喜びを味わうことができたと考える。

(b) 自他のよさに気づく喜び (成果 3・4)

鑑賞の時間を題材の計画の中で合計 4 回設定した。鑑賞の時間の中で、友達の作品のよさを見つけたり自分の作品のよさを伝えられたりしたことで自他のよさに気づくことができたと考えられる。学級の実態として「自分の作品のよさを見つけること」に課題があったが、事後アンケート調査では、87% (21/24 人) の児童が自分の作品のよさを見つけることができるようになっていた。このことから自他のよさに気づく喜びを味わわせることができたと考える。よさがわからなかったと解答した 3 名の児童は、思い通りに作品をつくることができていると解答していたため、友達によさを伝えられたとしても自分の作品のよさとして認識しなかったと考察することができる。

(c) 表現が高まる喜び (成果 2・課題 1)

成果 2 にあるように、表現と鑑賞を一体化させた授業を行うことで、児童に表現の高まりを感じさせることができたと考える。事後アンケート調査では、「友達の作品を見る時間 (鑑賞の時間) は必要だと思いますか？」という質問に対して 96% (23/24 人) が必要であると回答していた。理由としては、「友達の作品をしっかりと見て、自分の作品をよくできるから。」というものがあり、鑑賞で学んだことを表現に生かして、表現の高まりを感じていることがわかる。また、この回答をした F 児は、授業後の感想にも「マスキングテープの技がきれいにできたからいい作品ができた。」と書いており、表現の高まりを感じているといえる。他の児童の感想にも、「工夫がうまくいった。」や「達成感を感じた。」というものが数多く見られる。このことから、児童は、表現が高まる喜びを感じることができたのではないかと考える。しかし、その反面、思い通りにできなかったと回答した児童は、6/24 人いた。この理由としては、5/6 人が事前アンケートで図工が得意と回答していることから、ローラーのみを使った表現は難しく、自分の理想 (得意な児童の高い理想) に近づけなかったからということが考えられる。教師がその児童の思いをしっかり

と理解し、助言を行うことが必要だったと考える。
(d) 認められる喜び (成果 2・3・4)

題材の終末で、クラス鑑賞会を行った。その際も付箋を利用して作品のよさを伝え合う活動を行った。付箋を使った鑑賞活動は 2 回目という事もあり、活発な交流が行われていた。児童は、自分の鑑賞シートに付箋が増えていくのを見てとてもうれしそうな表情をしていた。また、事後アンケートでは、クラス鑑賞会の感想の欄に「自分の工夫を見つけてもらっていた時はとてもうれしかった。」と答えているものが多く。自分の頑張りや作品が認められる喜びを味わうことができていたと考えることができる。さらに、作品が完成した後に、廊下に作品を掲示したことで、他の学年の教師や友達、地域の方などに褒めてもらう機会もつくることができ、よりたくさんの人から認められる経験をすることができたと考える。

8 おわりに

本研究では、つくりだす喜びを味わわせるための授業実践の分析を行い、その効果について考察した。その結果、表現と鑑賞を一体化させた授業展開は、表現や作品に対する自己評価を高めることができ、つくりだす喜びを味わわせることができることがわかった。今後はこの成果を踏まえ、さらに多くの児童につくりだす喜びを味わわせることができるように、本研究おける課題点について改善していきたいと考える。

9 主な引用・参考文献

- 福岡教育大学附属福岡小学校 竹下 1987 学ぶ喜びを生み出す授業―見直し活動を活かす指導のしくみ―図画工作科 P131 北大路書房
- 五十嵐実 2011 表現と鑑賞の一体化を目指した指導の工夫
- 石井康義 2012 「つくりだす喜び」を味わわせる図画工作科の指導の在り方 静岡市教育センター
- 國清あやか 2014 創造的想像力を育む造形科授業づくり 広島大学附属小学校 学校教育 8 月号
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説図画工作科編
- 文部科学省国立教育政策研究所 2010 特定の課題に対する調査―小学校図画工作科・中学校美術―
- 日本美術教育学会 2015 研究代表者: 松岡宏明 研究分担者: 赤木里香子・泉谷淑夫・大嶋彰・大橋功 萱のり子・新関伸也・藤田雅也 図画工作科における鑑賞学習指導についての全国調査集計
- 渋谷典子・荒金庸子・中園順子・奥澤司 2010 表現と鑑賞の一体的な指導を通じた授業の在り方 ―みて、思いを深めて伝えることで造形・美術に親しむ―
- ヴィゴツキー 1930 訳 福井研介 1979 児童の想像力と創造 新読者社